

岡山市近世寺社建築調査 (2)

建造物研究室

今年度は、前年の補足調査として7月31日から8月4日にかけて1次調査と2次調査を行い、前年度分と合わせて報告書にまとめた。最終的な調査件数は、1次調査が170件であり、内37件についてさらに2次調査を行った。事前に市内には481件の寺社があると確認されていたが、内13件は昭和52年度の県近世社寺緊急調査で調査済みであり、さらに予備調査で125件の寺社で近世の主要な堂宇が失われていることが判明していた。したがって今回調査すべき対象は343件であり、結果として市内の近世寺社建築の約半数を調査したことになる。したがって調査結果は、市内の寺社建築の大まかな動向を示すものと思われる。

近世の寺社建築遺構の特色の一つは、幕府や藩に所属する御大工から村落内に居住する村大工まで幅広い階層の大工による作品が混在していることで、これは中世以前の建築遺構ではみられない。今回のように悉皆に近い調査を行うと、それら全ての建物が対象となり、その分類指標が必要になる。

岡山市東部は、中世より西大寺や福岡などの町場があり、独自の文化圏を形成した邑久地方の一部を占める。ここに邑久大工という在方集住大工がいることはすでに知られていた。在方集住大工とは、特定の在方に集まって住み、幾つかの棟梁家のもとに組織されて国郡の境界を超えて出稼ぎに行く大工集団のことである。調査初期の段階から彼らの作品には注意していたが、彼らは特定の性質を備えた絵様を継続して使用していたので、かれらの作品を絵様によって識別することが可能であった。と同時にその他の絵様、特に若葉部分の彫刻技法の差異が大工の種類を示すことが判明してきた。以下、市内にある9種類の絵様と、それを使用した大工の種類について報告書の論考に従って概述する。

(1) **三ツ又型若葉** (写真1) 長短2枚の若葉の長い方の先端が三ツ又形になる。岡山藩の菩提寺である曹源寺山門(1698年)や同仏殿(1824年)、玉井宮〈旧東照宮〉隨身門(18世紀前期)などで用いられ、今回の2次調査では清泰院本堂(1664年)、石門別神社本殿(1717年)、正法寺二天門(1773年)、松琴寺瑜伽大権現拝殿(1796年)などにみえた。曹源寺、玉井宮、清泰院、松琴寺は藩主関係の建物であり、石門別神社を建てた城下古京町在住の鳥羽姓の大工の後裔が、文政八年(1825)の西大寺観音院三重塔の修理棟札で「御小作事方棟梁」を名乗っていることなどから、お抱え大工を含む城下の町方大工によって用いられた絵様であると推定した。

(2) **単純2葉型若葉** (写真2) 長短2枚の単純な葉からなる若葉である。これは総じて18世紀前期までの建物に限られ、時代的色彩が強いので、大工の種類を考える際には役立たなかった。

(3) **削り出し型若葉** (写真3) 若葉の部分を広範囲にわたって削って低くし、その中に若葉だけを浮彫りのように立体的に彫るものである。児島湾周辺と備中領に非常に多く分布し、円蔵院表門(17世紀後期)、栗村神社本殿(1702年)、乗典寺本堂(1731年)、三蔵院本堂(1732年)、掌善寺観音堂(1736年)、盛隆寺仁王門(1762年)、同本堂(1782年)などが2次調査物件である。大工名は、郡村の安井

1 松琴寺瑜伽大権現実拝殿(1796年) 2 玉井宮〈旧東照宮〉本殿(1645年)

3 三蔵院本堂(1732年)

姓の大工が足守藩の陣屋町に建てた乗典寺でしか判明しなかったが、郡村は地誌や藩史料によれば近世後期に400軒弱の住民の約3分1が大工とその関連職種で占められる特異な在郷町であった。したがってこの種の絵様は郡村大工のものとしてよいと思われる。ただし郡村は、在郷町的要素の強い在方であるから、これを町方大工と在方集住大工のいずれとしてよいか今後の検討課題である。

(4) うねり型若葉 (写真4) 若葉全体が大きくうねる。市域東部の西大寺周辺に18世紀前・中期に限ってみえることから、(3)(5)(6)のいずれかの絵様の一時代の様相を示すと思われる。

(5) 邑久大工の絵様 (写真5) 尾形・田淵の2つの棟梁家のものしか確認できなかったが、ほかの絵様と比べると単純で線が太い。尾形太郎左衛門末忠の妙広寺客殿 (1753年)、尾形太郎左衛門末次らによる普門院本堂 (1746年)、田淵市左衛門勝繁による明王寺観音堂 (1786年) などが、その特徴をよく示している。邑久大工については他の棟梁家の絵様を確認する作業が残された。

(6) 芽吹き型若葉 (写真6) 絵様全体に線が細く、若葉は大きくうねりながら芽状の突起をもつ。市域東部の古くから寺院が集まる地域にあり、浄土寺本堂 (1704年)、長楽寺本堂 (1750年)、無量寿院如法寺本堂 (1768年) の調査で近在の村に住む徳田・尾野姓の大工作と判明する。地理的には邑久大工系の在方集住大工とも考えうるが、同じ絵様が(1)か(3)の作と思われる妙林寺仁王門 (1754年) にもみえるので町方大工との関係も窺える。この大工集団の性格解明は今後の課題である。

(7) 村大工の絵様 (写真7) 近世前半期の村大工の作は、市域北部の山間地帯に残る菅野八幡宮本殿 (1669年) や天神社本殿 (1700年前後) しかないが、絵様は稚拙さが目立つ。ところが18世紀後期以後、彫り方も従来と異なる新奇な絵様が1次調査物件の多くを占めるようになる。この種の絵様は数の上から村大工の作かと思われるが、今回の調査では十分に把握するには至らなかった。

(8) サヤエンドウ型若葉 (写真8) 若葉部分にサヤエンドウに似た突起がある。17世紀には広くみえるが、18世紀以降になると市域北部や西部に限られる。市北方の建部の大工である藤井又太夫の建てた幸福寺本堂 (1732年) のように、建部や美作あるいは備中の大工が用いた絵様と思われる。

(9) 木津大工の絵様 (写真9) 妙教寺霊応殿で赤穂藩木津村の在方集大工棟梁野村家の絵様をみることが出来る。市内には類例のないものである。

このほか報告書には、1・2次調査物件すべての絵様を含めた写真と解説を載せ、邑久大工の詳細な歴史と市域の近世瓦の編年と生産地比定を行った論考も掲載している。 (藤田盟児)

4 無量寿院如法寺 仁王門 (1721年)

5 普門院本堂 (1746年)

6 長楽寺本堂 (1750年)

7 菅野八幡宮本殿 (1669年)

8 幸福寺本堂 (1732年)

9 妙教寺霊応殿 (1741年)